

Hiroshima University Hospital News

小児がん患者の生活を支える アバターロボで遠隔授業



提供：(株)オリイ研究所

長期フォローアップにも力注ぐ



長期フォローアップで医師や看護師らが患者さんの現状などについて
情報共有を図るカンファレンス

■ 治療後を見据えた小児科の取り組み

広島大学病院小児科では、難病の子どもたちへの積極的な学習支援に取り組んでいます。2018年からは高校生を対象に、アバターロボットを採り入れた遠隔授業を導入し、生徒の利用も増えています。また長期的視野に立って、治療後の生活を支援する取り組み長期フォローアップにも力を入れています。

入院中の高校生 教室と結ぶ

遠隔授業 治療への意欲もアップ



提供:(株)オリイ研究所

2018年にアバターロボット「OriHime(オリヒメ)」を導入するという新しい形で生徒が高校の授業に出席するシステムがスタートしました。高校の教室と病室をICTで結び、やり取りができます。入院中の生徒に替わってオリヒメが教室に置かれ、そのカメラとマイクから映像と音声病室のタブレット端末にリアルタイムで届けられます。入院中の生徒は授業を見聞きするだけでなく、自分の声を先生やクラスメートに伝えることもできます。タブレットの操作で手を挙げたり、拍手したりの簡単な動作も可能です。当初は入院中の生徒側に教員の付き添いがなければ、出席が認められませんでした。2019年11月からは付き添いがなくても出席扱いが可能になりました。この遠隔授業は、2018年度1人、2019年度2人でしたが、2020年度は8人と一気に増えています。オリヒメは現在3台体制で、他の生徒はタブレット、ウェブカメラでやり取り

して授業に取り組んでいます。

小児科の川口浩史准教授は、入院中もオリヒメを使ってグループ学習に参加したり、クラスメートとの会話を楽しんだり教室の雰囲気を感じることができると言います。「交流を持つことで、前向きに入院生活を過ごせます。病室で安静にして病気のことばかり考えるよりは、生活にメリハリが出て治療へのモチベーションも高まります。病状の好転につながったり、復学もスムーズに進んだりという影響が出ています」と効果を実感しています。



小児がんの子どもの教育セミナー

数は休学、留年という形になっていました。留年すれば復学したとしても、友人たちとは1年遅れになり、高校生活の楽しみも少なからず減ってしまいます。川口准教授らはこれを改善しようと、広島県教委に「高校生にも院

本院は小児がん拠点病院に指定されています。全国で15施設、中国四国ブロックでは唯一の指定病院で、長期入院している子どもたちも多くいます。苦しい治療を続ける中で、前向きに入院生活を送れるよう、心を砕いています。特に教育は重要になります。小中学生向けには院内学級があり、比治山小、段原中の分校が設置されています。しかし高校は義務教育ではないため、院内学級はありませんでした。個人で通信教育や家庭教師を付けるなどで対応するしかなく、大多

内学級を」との働きかけを続けてきました。高校講師の院内派遣へ向けて働きかけを続けていましたが、しばらくは進展がありませんでした。しかし2018年に県教委からの提案で、オリヒメでの遠隔授業が実現しました。

現在、遠隔授業ができるのは本院だけですが、川口准教授は「今後はさらに体制を整えて他院にも広げる活動に取り組みたい」としています。

年齢経てから晩期合併症のリスク

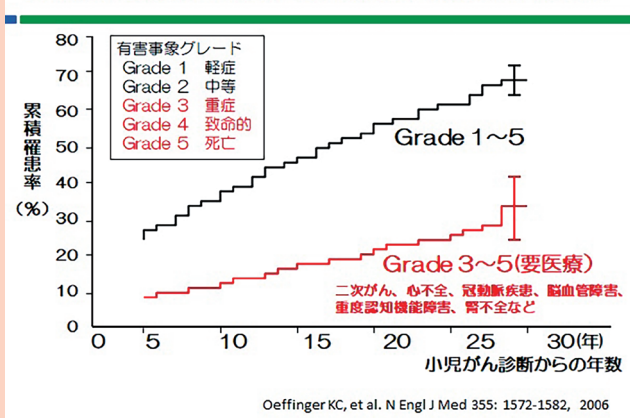
成長後も定期的な健診で見守り

退院後の生活を長い視点で見守る長期フォローアップも近年、注目されています。小児がんから回復した後も、年齢が高くなって薬物・放射線治療や手術の影響などに苦しむ患者さんも少なくありません。本院では退院後も定期的に診察を受けてもらうほか、成人してからあらためて、受診するケースもあります。

以前は小児がんから回復して、5年程度経過すれば、病院からは「卒業」することが多かったといいます。しかし近年は年齢を経たから影響が出る晩期合併症も知られるようになり、成人後も長期にわたって定期的な健診を勧めています。成長ホルモンの分泌不全では、疲れやすい、集中力が続かない、意欲の低下のほか、コレステロール・中性脂肪の増加などの症状が現れます。その他さまざまな臓器や神経、内分泌系に晩期合併症の可能性が指摘されています。



小児がん経験者の慢性疾患有病率は増加していく



また小児がんからの回復患者の中には、保護者からも積極的に病名を伝えていない事例もあります。このため、本人がどのような病気かどうかという治療を受けたのか、はっきりと分かっていない、というケースもあります。川口准教授は「自分の病気をまず知ることが大切」といいます。診察の際には長期フォローアップ手帳という治療の内容や経過定期健診の結果などを書き込んでもらう日記を使うようにしています。この中には晩期合併症の可能性なども記してあり、早い段階で気づけるようになっています。

40歳台で自分の病名を知るケースも

40代になってから晩期合併症をテレビで見たり、受診した方もいました。「病気は治ってるのだから、頑張れといわれるが、疲れやすく、集中できない」などと訴えられて、検査で成長ホルモンの値が低いなどの傾向が出ていました。晩期合併症と診断されました。そのことで患者さんは「体調不良などの理由が分かり、スッキリした」と述べられたとのこと。今後はさらに精査し、必要があれば治療で対応することにしています。

長期フォローアップ外来では月1回程度、患者さんの情報を共有するためカンファレンスを行っています。小児がん、内分泌の専門医、看護師、小児がん相談員、臨床心理士などが集まり、検査データや生活ぶりなどを共有しています。治療後のよりよい生活を送っていただくために、長い視点で患者さんを支えています。

ニュースアップ

おもちゃセット50点 寄贈受ける

東京おもちゃ美術館と日本財団から「難病児のためのおもちゃセット」約50点を広島大学病院に寄贈いただきました。

セットは、朝食のままごとセットからパペット、ダーツ、皿回し、沖縄音階の小型木琴まで多彩なおもちゃがそろっています。病院では小児病棟のプレイルームやリハビリ室を利用する子どもたちに使ってもらうことにしています。小児科の岡田賢教授は「たくさんのおもちゃを寄贈いただき大変感謝しています。子どもたちも喜ぶと思います」と歓迎しています。

東京おもちゃ美術館はNPO法人が運営しており、大人も子どもも、触って遊んで楽しめる施設です。今回の寄贈は日本財団の支援を受け、「病気や障害がある子どもたちにも、好きな遊びで夢中になる経験をしてほしい」と製作。医療、看護、保育の専門家らの協力で、「五感で楽しめ、気持ちいい」「周りの人も一緒に笑顔になる」などのコンセプトで、世界から集めたといいます。全国100カ所の病院や福祉施設などに贈っています。



緑内障週間で広島駅前「エールエールA館」をライトアップ

中途失明原因の第1位となっている緑内障について、早期診断・治療を呼び掛ける「世界緑内障週間」(3月7日～13日)に合わせ、JR広島駅前のエールエールA館と、宇品大橋をグリーンにライトアップしました。日没から午後10時まで。

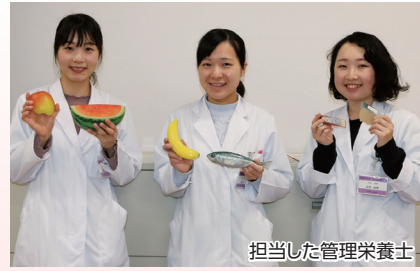
緑内障は40歳以上の20人に一人は罹患していると報告されています。放置すれば失明の恐れもある疾患ですが、治療する薬剤も増え、手術療法も選択肢が広がっています。早期発見し、継続治療することで日常生活に支障ないレベルにとどめるケースも増えています。

日本緑内障学会ではこうした正しい知識を広め、眼科受診を促す目的で、緑内障のシンボルカラーのグリーンにライトアップする啓発活動を展開しています。これを受け広島大学病院眼科でも活動に取り組み、これまでの宇品大橋に加え、今回新たに広島駅南口開発株式会社のご協力で、エールエールA館のライトアップが実現しました。



栄養管理部
情報

～免疫力upのために～
バランスの良い食事を
心がけましょう!



担当した管理栄養士

免疫機構には、様々な栄養素が関わっています。必要な栄養素を摂取するためには、主食・主菜・副菜をそろえることがポイントです。そうすることで自然と栄養のバランスが整いやすくなります。

副菜

ビタミン・ミネラルの供給源



野菜

きのこ

海藻類

主菜

筋肉や血液をつくるもとになる



肉

魚

卵

大豆製品

1食あたり
●主食1品
●主菜1品
●副菜2品
が目安です。



主食

エネルギー源となる



ご飯

パン

麺 など



乳製品

果物

1日1～2回
プラス1品

不足しがちな、
カルシウムや
ビタミンを
プラス!

免疫力を高めるには、バランスの良い
食事の他に適度な運動や休息も大切です。



診療科最前線

「総合内科・総合診療科」

(診療科長:伊藤公訓教授)



▶ 診療科の特徴

医療の急速な専門化・細分化に伴い、プライマリ・ケアを行う医師(総合医・家庭医)への社会的ニーズが高まっています。多様化、複雑化する疾患を踏まえて、全人的な診療を行うことのできる総合診療医の育成を目指しています。患者さんの抱えるさまざまな問題に、いつでも幅広く対処できる能力を身につけており、『何でも診る専門医』とも言われています。在宅診療や地域の保健・予防など、住民の健康を守る役目も担っています。

▶ 患者さんの動向

毎月50名ほどの初診患者さん、及び500名ほどの再診患者さんを診療しています。他の病院で診断のつかない発熱やしびれ等の症状でご紹介いただく機会も増えています。

▶ 得意分野

大学病院は高度に専門分化されており、どの科を受診すればよいかわからない患者さんに対して、必要に応じて適切な診療科へ引き継ぎをさせていただきます。受診を契機に心因性の疾患や膠原病、悪性疾患などが見つかると、各専門家へ紹介し、適切に加療いただいたこともありました。複数領域にまたぐ症状などで、何科を受診すべきか悩まれた際には、ご検討ください。

▶ かかりつけ医との連携

大学病院では、一般的な疾患から珍しい病気に至るまで、幅広い分野にわたり診断・治療を行っています。かかりつけ医の先生方と常に連携を取りながら診療をしています。

▶ 新しい動き

今年度より総合診療科に漢方医療を中心とした新しいチームが加わる予定です。西洋医学にとどまらず、さまざまな視点から治療にあたりたいと考えています。



催しのご案内

(2021年5月~7月)

自宅で学べる 肝臓病教室

視聴期間: 6月14日(月)~7月14日(水)

開催方法: 肝疾患相談室ホームページからの視聴

(講演動画配信)

URL: <http://shounai.hiroshima-u.ac.jp/counseling/>

(「広大 肝臓病教室」で検索)

内容: 肝炎について

申込: 不要

問い合わせ: 肝疾患相談室

☎082-257-1541 (10:00~16:00)



がん治療を支える患者サロン

申し込み・問い合わせ先
がん相談支援センター
☎082-257-1525

婦人科がんの最新の治療について

5月19日(水) 13:30~14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F4会議室+zoom
講師: 産科婦人科医師 古宇家正

悪性リンパ腫について

6月17日(木) 13:30~14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F4会議室+zoom
講師: 血液内科医師 福島伯泰

頭頸部がんの最新の治療について

7月21日(水) 13:30~14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F4会議室+zoom
講師: 頭頸部外科医師 上田 勉

※会場参加10名と、zoomによるオンライン参加も可能です。新型コロナウイルスの感染状況によってはオンラインのみとなる可能性があります。